

人文学部 後期日程 令和7年度入学試験 小論文
出題意図と解答例

I

【出題意図】

「統合的教育」に関する比較的抽象度の高い英語の文章を正確に読みとる英文読解力と、その文章を参考にして今後の自分の学びについて考え、論理的に述べる思考力、表現力を試す問題である。

【解答例】

問1

ハクスレーによれば、文学者の役割は様々な話題を関連づけてまとめること、例えば芸術と科学、客観的事実と直接的経験、道徳と科学的評価等の間に橋をかけることであり、それは統合的教育のモデルになり得る。(97 字)

問2

一つの学問領域を究め、自分の知的拠点を築くことは大切なことだが、それと同時に、様々な学問領域に親しむことも重要だろう。ハクスレーの言う「人間の基本的諸問題」に向き合おうとすれば、自ずと統合的、領域横断的な思考が必要になるはずだからだ。例えば地球環境問題に取り組むなら、自然科学の知識だけではなく、自然と人間の関係を問う哲学的考察や、これまでの経緯を振り返る歴史学的検討が欠かせない。おそらく難しいのは、そうした様々な領域の基礎を身に着けることもさることながら、複数の知を有機的に関連づけ、自分の腑に落ちる形にまとめることではないか。ハクスレーは文学者を統合的教育の重要な担い手と見ていたようだが、であれば、試みに優れた小説を読み、そこから様々な領域の知を関連づける手さばきを学ぼうとするのもいいだろう。手始めに、かつて愛したジュール・ヴェルヌの地球を主題にしたSF小説群を、その観点から読み直したい。(400 字)

II

【出題意図】

私たちは、様々な「法(決め事)」のもとで暮らしているが、最近でも多くの問題がメディアによって喚起されている。ドイツ、日本の科学者たちが、第二次世界大戦以前・以後において悪法とどのように向き合ってきたのかを文章から読み取り、社会生活の規範である「法」とはどうあるべきかを、論理的に思考し、表現することを試す問題である。「筆者の意見」はあくまで参考であり、自らの知見を例に論述することを期待する。

【解答例】

問1

第二次世界大戦以前は、両国の科学者とも「悪法も法」として抵抗しなかった。第二次世界大戦後、ドイツでは自分たちが犯した間違いを率直に認め発表したが、日本では反省を口にす

ることがなかった。(92 字)

問2

私は、「法」であるから従うのではなく、その妥当性について常に考えなければならないと考える。私は、中学時代、「勉強すること」に批判的な空気、決め事の中にいた。「あいつ勉強なんかしているよ」、「ガリ勉は嫌だね」などの言葉を聞きながら生活を送ることは大変であり、やがて仲の良かった友人からも無視をされたり、カバンや靴を隠されたりなど、いじめを受けるようにもなった。先生に相談することもできず、相談すればもっといじめられるという恐怖から、不登校にもなってしまった。学生であるにも関わらず、「勉強しない」という決め事には妥当性がないはずである。したがって、私は、「法」であるから従うのではなく、その妥当性について常に考えなければならないと考える。そして、「法」に妥当性がないこと、誤っていると考えられるならば、救済を求められる信用できる機関の設立も必要である。(375 字)